

俺と、彼女、の、

ラッキー  
キ  
事情



彼女はママチャリに乗っている。古びたその自転車は、漕ぐたびにキーショック、キーショックと鳴る。俺はどんな騒音の中でも、このキーショックを聞き分けることができる。彼女が俺の部屋に来る音だ。ほら今夜も、はるか道の向こうから、キーショック。キーショック。

そんな彼女の訪問を待ちわびながら、俺は寝転がっているベッドの上に小さいビーズを見つけた。枕の中身だ。その縮み上がったマカロニみたいな白いビーズを摘まみ上げる。天井に向かって放り投げる。ほんの一瞬の静寂ののち、つとん、という音がする。俺は満足して再びキーショックに耳をすませる。

キーショックがアパートの前に止まった。かんかんかん、という階段を駆け上がる軽やかな音がする。もうすぐだ。ほとんど毎晩のことなのに、俺はいつもわくわくする。「アキ」と彼女の名前を呼んでみたりもする。

彼女の名前はアキだ。ついでに言えば俺の名前はハル。も一つついでに言えば、アキは俺の妹だ。

そんな自転車、とお母さんはいつもアキに言っていた。

そんな古い自転車、なんで好んで乗りたがるの。お前たちが小さい頃から使っているのよ。ペダルももう重いはずよ。新しいの買ってあげるわよ。ほら駅前の中島サイクル、大安売りなんですよ。

中島サイクルは年がら年中大安売りだよ、て俺が言っても、お母さんはいつだって聞いちゃいない。

するとアキはこう言う。

いい。私にはちょうどいい。

お母さんはこう言う。

何がちょうどいいの。もう分からないわ。あんたに似合った、可愛いのを買ってあげるのに。

こう言われると、アキは決まって微笑み返す。無言のまま。何も語らぬまま。

けれど俺だけにはこっそり教えてくれるのだ。

「あのさ、使い過ぎて擦れて擦れて、どうにもならなくなったカンジがいい。ママチャリも私も、死んじゃう寸前。いつ壊れてバラバラになるかどきどきする。でもなかなか壊れないふてぶてしさがいい。見えないところで、どんどんすり減っていく。私の下で、どんどんどんどん消耗されていく」

多分お母さんには分からないだろうな。そのことをアキはよく知っている。

彼女は齢十五にして、すでにあらゆることを知っている。お父さんとお母さんの別居のわけも。俺が学校に行っていないことも。自分が美しいということも。

玄関に入るなり、彼女は俺の部屋に直行し、さっき投げ捨てたビーズを探し始めた。

「ほら、あった」

部屋の隅っこに転がっているビーズを拾うと、そう言って笑った。それからすぐにまた天井に向けてビーズを放った。つとん、という音が小さく響く。

「枕、小さくなった？」

アキは俺の枕を触った。

「まだだな」

「ふうん。中身がずいぶん落ちてんのにね。ねえねえ、中のビーズが全部抜けてこの枕が枕じゃなくなるのと、私達が死んじゃうのとどっちが先かな」

「難しいな」

「ねえ、私もそろそろ色んなものが減ってくるお年頃なんだって。お肌の張りとか。細胞分裂の数とか」

「そんなの見たって分からないよ」

「ホント？ 嬉しい」

ぴょんとひと跳ねして部屋の中を見回してから、彼女は少し声をひそめた。

「お父さんは？」

「さあ」

「あの女の人のところ？」

「もう別れたろ」

「そうなの？」

「だってこの頃、電話してない」

マフラーをはずしながら、アキがちらりと俺を見下ろした。

「そんなの、別れたことにならない」

「そうかな」

「そうだよ」

凍えるような寒さの中ママチャリを飛ばしてきたからか、彼女の白い頬が真っ赤に色付いている。

「でも俺だったら、いつだってその人のことを感じていたいな。電話もできるなら二十四時間していたい」

「やだそんなの。一緒に住めば」

「一緒に住んだらだめなんだ。親父とお袋を見てたら分かるだろ」

「ああ、そうね」

「寸前がいいんだ。暮らす寸前。会う寸前。触れる寸前。やる寸前」

突然アキが俺の手首を掴んだ。半ば引き上げられるような形になりながら、俺はベッドの上に起き上がった。彼女は鼻を近づけると、俺の手のひらをくんくんと嗅いだ。

「鉄の匂いがする。また行ってたでしょ」

「うん」

「いつも連れてってって言ってんのに」

「寒いかなって思って」

「関係ないよ。今日星キレイだった。ねえこれから行こう？」

「いい。もう寒いから」

ぶううとふくれて見せると、アキが俺に抱きついてきた。彼女の重みが二人の体を難なくベッドの上に押し倒す。

「ねえ計画は？ お兄ちゃんのA計画」

「寒いよ。風邪ひくぞ」

「いいの。寒いと星がキレイじゃん。その下でなんてサイコー」

彼女がしゃべるたびに、吐息で胸の辺りが熱くなる。肩に絡み付いている彼女の腕をほどくと、俺はアキの顔を見た。

「……ホントにいいのか？」

「何が？」

何が？ なんて聞かなくたって分かってるくせに。彼女の瞳が俺を見下ろしている。その瞳に見つめられているうちに、だんだんと俺は恥ずかしくなってきた。アキが俺に言わせようとしていることが分かるからだ。

「すごく変だよ、俺ら」

「うん。分かる。だからいいの」

「見つかったら、さらし首だ」

アキがけらけらと笑った。

「だからいい。スリリング」

俺たちはいつも、ぶっ壊れる寸前だ。

また彼女の顔が俺の上のにのっかってきた。髪が、さらりと俺の唇にかかる。俺の唇のすぐ横を噛む。いてっと

言う間もなく、今度は反対側を噛む。それから彼女は、自分が噛んだあとをぺろぺろと舐め始めた。

「ねえどこまでが寸前？ どこまでが見つかっても平気？」

アキの唾液の匂いがすぐ近くにある。自分の唾液の匂いと似ていた。臭い。

「お兄ちゃんて面白い」

「なんで」

「なんでも。私の自転車みたい」

古いママチャリ、キーショッコはもうすっかり彼女のものなのだ。お母さんはとうとう新しい自転車を買うことをあきらめたらしい。

「なあママチャリってママ、って言うくらいだから女？」

「自転車が？ さあ。でも車よりは女性っぽいかも」

「つうかちょっと情けない男てカンジかな。尻の下にしかれてて」

脇腹を締め付けるアキの両足が熱い。

うん、確かに。キーショッコは俺みたいだ。

「ねえお兄ちゃん」

やがて体温が混じり合い過ぎて、お互いの手足の見分けもつけられなくなる頃、アキがぼそりつつぶやいた。

「私、お兄ちゃんのB計画、第一段階遂行したよ」

思わず俺は彼女を上に乗せたまま跳ね上がった。驚いたアキが俺にしがみついた。

世の中は運のいい奴と悪い奴に分かれている。教室も電車も道端もどこもかしこもその二種類しかいない。

何を隠そう俺は自分をかなりラッキーな人間だと思っている。

ラッキーとアンラッキーは見ただけじゃ絶対に分らない。だから人は俺をアンラッキーな奴と思うかも知れないが、そんなことはない。同級生に殴られては金を巻き上げられる。家に帰れば両親が絶えず喧嘩してる。体力は並、得意科目なし。将来の目標もなし。貯金もなし。こんな俺はアンラッキー？ ノォ！

いいのだ、どんどん俺をいじめてくれ。別居でも離婚でもしてくれ。俺をなんとアンラッキーな奴だと笑ってくれ。

本物のアンラッキーな人間とは、自分をラッキーだと思い込んでいる奴だ。思い込んで、人を笑っている奴だ。それを俺は知っている。

だから俺はラッキーなのだ。

俺は夢も目標も持っちゃいないが計画を持っている。誰にも真似できない俺プロジェクト。なぜ真似できないかというと、俺はあるものを持っている世界でただ一人の男だからだ。それを使って、腹がよじれそうなくらい面白いことをしてやる。それが俺のB計画。ざまあみろ。俺みたいなラッキーな奴、そうそういない。

あるもの、とはアキだ。俺は世界でただ一人、アキという妹を持っている。

フユばあさんが階段下でわめいていた。

「タベまたあの子連れ込んだね？ あの子はやめとけて言ったろ」

自称アパートの管理人、101号室に住むフユばあさんは、頼みもしないのに各部屋の玄関前を掃きまくり、郵便物をチェックしまくり……住人の行動を知り抜いているという恐るべきばあさんだ。俺はアパートの階段を下りて、ハウキ片手に仁王立ちしているフユの前に立った。

「だからあ、妹だって何度も言ってるっしょ」

「あんな目をしている女は危ないんだよ。大きい目の女はね、人より色んなものが見えているから  
ずる賢いんだ」

んじゃあフユはほとんど何も見えてないに違いない。俺は重く瞼がのしかかっているフユの目を見た。

「で？ 昨日はどこまで聞いたっけ？」

黙っていると、フユは勝手に造り上げたアキの半生をたっぷり一時間は喋る。付き合わされるのはごめんなので、俺は自分から話を切り出した。

ああ、とフユの顔が輝いた。

彼女が人の悪口以外に好んで話すのは、自分の恋愛遍歴だ。自称『あまりにも切なくて、話していると涙が溢れてくる』体験談。

「『あの人』に結婚を申し込まれたんだろ？ で？ それでどうしたの」

「だけどさ、『あの人』には奥さんも子供もいるだろ？ だからあたしゃ悩んでねえ。ホント、やっぱり人を傷つけちゃいけないからね。本当に悩んだよ」

お話の中のフユは気高く貞淑で、常に自分を犠牲にして他人を思いやる、美しい人になっている。そいでもって『あの人』は話すたびに歳が変わったり職が変わったり、家柄が変わったり国籍が変わったりする。

俺はフユが嫌いじゃない。この醜さ。盲目さ。自分をアンラッキーだと一〇〇%信じ込んでいる彼女は、とても可愛い人だと思う。

「だからさ、あの夜『あの人』が泊まっていた宿の部屋で、こう切り出したんだよ。もうこれっきりにしましよって。そしたら『あの人』ったらガーッとあたしの体を抱いてねえ。もうあたしゃ男の人とそんなことするの初めてで恥ずかしくて恥ずかしくて...」

彼女はいつも処女をいきつ戻りつする。昨日は確か何度一晩中愛を確かめ合ったか分からないって言ってたけど。それもすんげえ描写付きで。『あの人』の舌があたしのあそこをどうのこうのって。

彼女の性愛体験の独白が始まった。毎度のことながら、真偽のほどは定かじゃない。が、大海にひっそりと沈んでいる宝物みたいに、ほんの一つでも真実があるかもしれない。そのことが俺の体をムズムズさせる。

平日の真っ昼間、近所の子供の泣き声が聞こえていた。その声はフユにもっともっととせがんでいるようにも聞こえるし、もうやめてくれと懇願しているようにも聞こえた。

キーショッコ。キーショッコ。キキィ、ガチャン。カンカンカンカン。タタタ、ガチョ、キシーツ、バタン、ポンパポンパ、タタタ、ぴよこん。

こんなにうるさくちゃ、フユみたいなばあさんにもばれるのは当然だ。

「うん、今度デートなの。決まったの。行ったほうがいいよね？」

アキがぴよこんと俺のベッドに飛び乗る。塾帰りのアキはいつもセーラー服姿だ。セイフクは大人びた彼女の美貌にあやふやな色香を加える。意識せずともコスプレな。天然制服パブな。

キーショッコにするみたいに、アキが俺にまたがる。そんな彼女の内腿を見ながらつぶやいた。

B計画続行のゴーサインを。

「イッて。イッてくれ」

人に金を巻き上げられる奴はアンラッキーか。殴られる奴は。あざ笑われる奴は。教室の中で居場所を失った奴は。そういう奴を人はアンラッキーと呼ぶのか？ いや俺は断固そうは思わない。

それが証拠に俺は忍耐強い。思慮深い。慈悲深い。注意深い。すべて浅はかな同級生らが俺に授けてくれたものだ。礼を言いたいくらいだ。若くしてこんなにも謙虚で無欲、洞察力のある人間になれた。こんな俺はラッキー？ イエス！

だから俺は世界で一番アンラッキーなああの男に、俺のB計画を捧げようと思う。ああなんと慈悲深い。あの男.....ナツに。

中学時代、奴が転校してきてからの二年間、俺はあの男に金を巻き上げられ続けた。昨日まで普通に話をしていたクラスメイトは、奴に同調して俺をあざ笑うようになった。

おかげさまで中学『無事』卒業後、かろうじて入学した高校にも、俺はすぐに通わなくなった。通学という凡人向けの行為を放棄したのだ。なぜなら俺は、とっくに悟っていたから。

人間なんて大したもんじゃない。下らない。執着するなんて馬鹿げてる。みんないつか死んで腐って土に還る存在に過ぎないのに、偉そうだ。諸行無常の響き...俺はその響きをいつも聞いている。何年も何年も前にどこかのオッサンが言ったことをこうして実感しているのだ。学校なんて意味がない。ああ俺って謙虚。思慮深い。

ほらみろ、こんな俺はラッキー？

イエス！オフコース！

休日の昼間だってフユのお話は止まらない。

「愛するって偉大なんだよ。その人のためならなんでも差し出せる。なんでも許せる。自分が自分以外のものになれる」

それってただのジコマンじゃねーの。が、寛大な俺は黙って耳を傾けてやる。

「そんな自分に驚いて、そしてまたそれが気持ちよかったりするんだよ」

今日はいい天気だ。今頃、世界一アンラッキーなナツはアキと一緒にいる。ナツは多分アキに夢中だ。それを俺は知っている。だからアキに奴と付き合うことをオッケーしろと言ったのだ。

「欲をかいちゃだめだよ。人を恨んでもだめだ。心はいつも清潔にしておきな。愛は心に芽生えるもんさ。モノにいつの間にか生えるカビとはわけが違う。心の土はいつもキレイにしておきな」

可哀相なナツ。何も知らず、アキと歩き、アキを見つめ、アキにキスしたいとかって思ってる。頂点も頂点、奴の愛バロメーターが振り切ってしまう寸前、どんな爆弾が落ちるかも知らずに。

アキは俺の最終兵器だ。彼女さえいれば、俺はなんでもできる。

生まれ落ちた瞬間から、アキは神様が俺にくれた最高のプレゼントだった。可愛い俺の妹、アキ

。

俺たち二人はいつも一緒に遊んでいた。ことに彼女が中学に入る頃から、二人はある遊びに熱中し始めた。それは棚の奥に隠された、お父さんの本を読むことだった。タイトルは『調教姉妹』。

『「お姉ちゃん、恥ずかしがることないじゃない。本当はこうされたいんでしょ？ 私知ってるもん。お姉ちゃんが真夜中に部屋を抜け出して、ママと岩田さんの寝室の前にいること。何されたいの？ こういうことでしょ？」

理沙ちゃん、と懇願するようにつぶやいた姉の声を、理沙は無視した。そのままゆっくりと、動けない香緒里のパンティーを引き下ろした。そして抗う香緒里の両脚を強引に開き、恥ずかしげに潤み始めた姉の陰部を岩田に見せた。岩田は自分の男根をまだ無垢なピンク色のままの香緒里の肉芽にあてがった』

いつも朗読し合っては俺とアキは大笑いした。俺はアキの言う「ダンコン」という言葉が大好きだった。彼女が言うと、何やら高貴な、違うもののように思えるから不思議だ。

アキは本当に可愛くて美人だ。俺がぼけーとしていても可愛い。俺がだらーっと寝ていても美人だ。いつだって、アキはアキで、アキとして存在してくれる。俺の妹アキ。

俺は世の中に爆弾を落としてやろうと思った。常人には決して真似できない、特別なことをしてやろうと。危険区域立ち入り禁止のラインを踏み越えて、俺をあざ笑った奴らを、こっちから笑い飛ばしてやろうと。

これが俺のA計画。

そしてこの計画を完遂した暁には、こう叫んでやるのだ。

ざまあみろ、これが俺のアイノカタチだ。お前ら、アイって知ってるか？



彼女の唇がいつもより熱っぽく俺の唇の横に吸い付いた。けれど今日は噛み付くこともなく、彼女はすぐに俺の胸に顔を埋めた。

「ねえキスってどのくらい意味があるの？」

キスに単位なんかあるのかな。俺は黙っていた。

「もう奴とキスしたのか？」

「ううん。まだ」

「そっか」

てことは、彼女の唇はまだ処女だ。

「ねえお兄ちゃん」

「何」

「私達ってキスしちゃいけない関係なんですよ。世界はそういう風にできてんでしょ」

「……うん」

「そんなにキスってすごいこと？」

「……さあ」

「私達いつも寸前だよ」

「……」

「してしまったら、次には何がある？」

「……」

「体をくっつけることって意味があること？」

「……」

「ねえお兄ちゃん」

「……」

「聞いてる？」

「うん」

「ナツね、お母さんがいないんだって」

「……」

「ちっちゃい頃、家出しちゃったんだって」

「……」

「私が黙ってたら、どう思うって聞くの。だからうちもお父さんいないわよって言った。生きてるけど目の届かないところにいるって言ったの。そうしたらナツ笑った。そっか目が届かないだけかって」

枕の横にビーズが一つ転がり出していた。

あんあ、いいわあいいわあって言うとすぐ喜ぶんだよ。あたしの身体をね、駆け上がってくるんだよ。

フコは今日は肉欲モードらしい。興奮しているのか鼻の穴がぱっかーんと開いている。目もこのくらい大きくなればいいのに。

水曜日、時刻は正午になろうとしている。近所の子供が今日は笑っている。日付けはもうすぐバレンタインだ。

その上今日も晴天だ。真っ青な空が雲に汚されていない。

俺は朝から静電気バッチバチだった。触れるもの触れるものバッチンビリリンいいやがる。痛くて痛くて仕方がなかった。

インブダンコンニクメパンティー。あんあいいわあいいわああんあいいわあいいわあ……

アキは俺が天井に向かって投げ捨てたビーズを探そうともしない。何かをどんどん失っていくことを、あんなに面白がっていたくせに。

「ナツは私がお兄ちゃんの妹だって知ってるよ」

ぎょっとして彼女を見た。まさかお前がしゃべったのか。そう言おうとした時だった。アキが先に口を開いた。

「だって名字も一緒だし。それに、何より顔がそっくりだって言ってた」

まさか。胸がひやりと痛くなる。

まさか、あの男、俺の、B計画を、知って、いた？

そんな俺の顔色なんて意にも介さず、アキがまたつぶやいた。

「お兄ちゃんをいじめたのは、顔が気に食わなかったからなんだって」

俺は生まれて初めて妹を殴り飛ばしたいと思った。何一つ分かっちゃいないからだ。

俺はいじめられてなんかいねーよ。そんなことされるような間の抜けた人間じゃない。ただラッキーなことに若くして精神修行をさせてもらっただけだ。

「でも私の顔は好きなんだって。変だよ。あの人」

アノヒト、という言葉に叫びそうになった。アキがフユミみたいな妖怪になってしまうように思ったからだ。

「お兄ちゃん、アノヒト優しいよ」

けれどアキは俺の優しさなんかちっとも意に介さずにこう言っただけだ。

優しさ、てなんだよ。俺はまた叫びたくなった。あんな男が優しいのなら、俺なんかユニセフの親善大使になれる。赤い羽根でコートも作れる。緑色だって構わない。

窓から寒空を見上げた。体の大部分を闇に食い尽くされている月が、良く切れる刃物みたいに見えた。

「凶器が浮かんでる」

アキも俺の隣で空を見上げた。

「三日月は闇に体の大半を抱き締められてる。身を小さくして、でも抱擁の激しさを受け止めようとしてる。時々喉をのけぞらせて。満月よりずっと可憐で、慎ましやかで、でも情熱的。私は好き」

「満月は嫌いか？」

「満ち足りてるって傲慢だもん」

そう言い切ったアキの顔を見た。

「だから太陽は嫌い。自分の幸せになんの疑問も抱いていないように見えるから」

アキにかかると、太陽はアンラッキーになってしまうのか。あれ、違うか。ラッキーなのか。でも自分がラッキーだと気付かないってことはやっぱりアンラッキーなのか？

あれ？ どっち？

幸か不幸か。白か黒か。半か丁か。どっちだ。どっちだ？

俺はいつも自分の立っている場所について考える。いつだって足下は暗い。その上、風も強い。なんでこんなに立つのがつらいんだろう？　なんて時々考えたりもする。

誰かと手をつなぎたい。それだけだ。

誰か俺を、見つけて欲しい。

デートに行ってるわよ、とお母さんはあっさり言った。久々に聞く彼女の声が、やけに若々しく耳もとで弾ける。

なんかあの子最近ウキウキしちゃってさ。楽しげに、軽やかに、言うだけ言ってから、やっと思い出したように

あんた元気なの？

ついでに、

学校行ってんの？

俺は早々に電話を叩き切った。

気付くとフユが目の前にいた。女の成れの果て。お母さんとアキの成れの果てが。

「どうすりゃいいのかねえ」

今日のフユは、自分の部屋の前で、廃品回収に出された膨大な量のチラシを、わざわざ紐までほどこいて一枚一枚丁寧に折り畳んでいる。俺はアパートの階段に座り込んで彼女の姿を見ていた。

「恋心ってさ、なんか歩き始めた赤ん坊みたいなのがあるよ。危なっかしくせに、本人は楽しくて仕方がない。あっという間に転ぶくせに、すぐに立ち上がって走り出す。止まらないんだねえ」

そう淡々とつぶやくフユは、ホウキを持っている時より数段慎ましく見える。

「でもねえ。本当に赤ん坊ならいいけど。誰も傷付かなくてすむのにねえ」

本日は道徳モードらしきフユが、はあ、とお上品にため息をつく。

誰も傷つかない、なんてあり得ねえな。俺は腹の底で叫んだ。そんなことしたら、抵抗力がなくなつて人間は滅びてる。俺もフユも生まれてない。

傷付くのはラッキーなんだ。みんな気付けよ。人生がタフになる。

「だからさ、『あの人』も奥さんと子供を捨てられなかったんだよ。人を傷つけるって自分が一番傷付くからねえ。でも、あたしは自分を幸運だと思ってるよ。だって誰のことも傷つけなかったからね」

ばあさんは覚えている。会いに来なくなった『あの人』をずっとずっと覚えている。これはばあさんの妄想か。それとも事実か。いや、そんなのは多分どうでもいい。肝心なのはばあさんがラッキーかアンラッキーかということだ。どっちだ。

どっちだ？

「それ、本当の話かよ？」

とたんに、俺の体が勝手に跳ね上がり、俺の口が勝手に喋り出していた。

「本当の……本当の愛ってなんだあ？」

だだだっとう階段を駆け上がった。何やら体がムズムズする。もったいないと思った。こんないい天気の日。これだけでラッキーなのに。

部屋に飛び込むと枕を鷲掴みにした。カバーをむしり取り、窓を開け放つ。それからメッシュの目に指を入れ、力任せに引き裂いた。ばらばらばら、と中のビーズがこぼれ落ちる。

「ぐずぐずしてたら自分を消耗して死ぬぞ！」

俺をぽっかーんと見上げるフユの鼻の穴がぽっかーんと開いている。彼女の上に、白いビーズがばらばらと降り注いだ。

「ちくしょー、生きるってつれえー、うおおおおおー」

こんな天気のいい日に。フユの上に、雪が降る。

ギージョッコ。ギージョッコ。

二人乗りされたママチャリは不機嫌そうだ。アキが後部のカゴの中で立ち上がり、俺の肩につかまっている。俺は膝と足に予想以上の重みを感じ、歳を食ったな、なんて思う。その上ハンドル部分に取り付けられたお子さまシートのせいで、漕ぐ姿勢ががに股になっていた。知らなかった。ママチャリってがに股になるんだ。

アキの嫌いなフルムーンがこうこうと輝いていた。俺ら二人は、まん丸な月の下、夜の散歩に出かけていた。

「入れる？」

「もちろん」

手袋を忘れた両手が寒さのせいでちぎれそうに痛い。その分、驚くほど月は明るい。

「正門から入るわけじゃないでしょ？」

「裏に金網がぶっ壊れてるところがある」

「はー……意味ないじゃんねえ、いくら見えるところに警報装置仕掛けたって」

「全部見ようと思ったら疲れるだろ。だからわざと見えないところを作るの」

「なるほど」

俺らは近所の小学校に向かっていった。二人の母校でもある。アキが楽しそうに叫んだ。

「タコちゃんまだいるかな？」

タコちゃんとは住み込みの用務員さんだ。酒を飲んでいるわけでもないのにいつも赤ら顔で、焼却炉の前とか裏庭とかに出没する。極度の舌足らずなのかなんなのか、発音不明な言葉を話す。俺はそんなタコちゃんがうらやましかった。タコちゃんの理解不能なタコ語を愛していた。

キーショッコはどうやら二人分の重さにも耐えてくれたようだった。学校の裏手についた時、膝をどっと襲った疲労感とともに、キーショッコもほっとしたように見えた。

傾斜している石塀を先に俺がよじ登り、それからアキを引き上げた。

「忍者ごっこ」

よいしょ、と塀の上にたち、アキは笑った。

秘密の入口は他の人には分からないように金網がちゃんと張ってあるように見せている。が、ちょっと力を入れると、いとも簡単にべろんとめくれてしまう。実はこの大穴に俺が気付いたのは小学生の頃なのだ。裏庭の掃除当番になった時に偶然見つけた。あたりはちょうど木がたくさん植えられている箇所で、うっそうとした茂みの中に、ちょこんとこの出入り口は存在していた。

がががっと金網を押し上げて中に入った。続いてアキが入ると、すぐにまた金網を元に戻す。感心したようにこの手順を眺めていた彼女が

「開けゴマ」

とつぶやいた。

太陽の下で見ると、校庭は広がって見えた。誰もいない校庭に走り出ると、アキが振り返った。

「ここ、一番暗い。星も見える」

そう言いながら夜空を指差した。

校庭の真ん中は外灯も家々の灯りも届かずにいた。月光だけが校舎や遊具やアキの形を照らし出している。月影は二人の後ろを控えめについてきていた。

「鉄棒なつかしー！」

アキは言うが早い、一番背の高い鉄棒に飛びついて、くるりと前回りした。制服の裾と一緒に踊るように回る。白い太腿もくるりと回る。

「鉄くさー！」

そしてすぐに駆け寄ってきて、俺の鼻に自分の手を押し付けた。

「古い鉄の匂いがする。錆び付きそう」

それから今度はブランコのほうへと駆けて行った。

「ねえねえ、このブランコまだ健在なのね。なんかさ、私達がいる頃からすでにせえせえいってなかったっけ？」

そう叫ぶと、アキは古びたブランコに腰をかけ、足で勢いよく漕ぎ始めた。ギヒューッギヒューッとブランコが叫ぶ。

「子供の体重には絶えられんだろ」

俺もブランコに近付いた。大きく前後するアキのブランコをひっ捕まえると、座っている彼女の太股の両脇に足を乗せて二人乗りした。アキがちらりと俺を見上げた。

「でも俺ら二人だとどうかな？ ちぎれるかな？」

俺はぐい、と腰を突き出し、両手両足を踏ん張らせて漕ぎ始めた。ギヒューッとブランコが揺れ始める。またたく間に、月光が上下し始める。

俺は今日、賭けをする。もしもこのブランコがちぎれなかったら、俺はA計画を遂行する。どうやら頓挫しかけているB計画のかわりに、今夜は俺自身にA計画を捧げる。世界がどうひっくり返るか見極める。でも、もしこのブランコがちぎれたら...

ギヒューッギヒューッ。鉄の擦れる音がする。アキの好きな、消耗する音だ。見えないところで、どんどんどんどん減っていく。俺は更に力を込めてブランコを漕いだ。前後するたびに、冷たい風が耳もとをなぶっていく

。

「ねえ、お兄ちゃん」

ギヒューツに紛れてアキの声が出た。止めろって言っても止めないぞ。ますます大きく揺らぐ月光を睨みながら俺は思った。

「A計画、しょ？」

ギヒューツ。ギヒューツ。

「誰にも真似できないことがしたいっていつも言ってたでしょ？」

ギヒューツ。ギヒューツ。

「いいよ。しようよ。もう寸前はヤなの。先にあるものが知りたいの」

ギヒューツ。ギヒューツ。

「何が私に起こるのか知りたいの。お兄ちゃん。私の心に何が起こるのか知りたいの。わかんないの。色んなことが」

ギ、ギヒューツ。ギギヒューツ。

「お兄ちゃんのこと大好き。だからA計画しても構わない。でも、アノヒトとするA計画はもっと違うの？ それを知りたいの。お兄ちゃん何が特別なこと？ 何が人と違うこと？」

ギギヒューツ。

「お兄ちゃん……！」

ギギゴツ。

なんだ。

世の中はどれもこれも、案外タフだ。

オンボロブランコも。ママチャリも。

俺は一人、宙を飛びながら思った。

いやあしかし君は本当にラッキーでしたよ。なんたって首の骨を折る寸前だったんだからねえ。

そう言って医者カラカラと笑った。お母さんがやけに何度も何度も、彼に向かって頭を下げていた。

今日、俺は二ヶ月振りにアパートに帰る。

アパートに戻ってから、俺はアキがくれたプレゼントを開けた。リクエスト通り、中には枕が入っていた。お茶が入ったわよお、とお母さんが台所から俺を呼ぶ。

ぐっすりと眠っている間に季節は移っていたのか、痛い寒さは和らいでいた。どこかで花の香りがする。俺がいくらぼけーっとしていても、地球はちゃんと自転公転しているわけだ。ご苦労様だ。なんだ、俺のほうが自由の身じゃん。

俺は折る寸前だった首をコキコキと鳴らしてみた。どうやら折らなかった。これが事実だ。

新しい枕をベッドの上に放り投げた。俺は自分の部屋を出た。

(了)